日本体育大学紀要 22 巻 2 号 (1993) 97-102

興行としての女相撲に関する研究

金 田 英 子*

(平成 4 年 11 月 9 日受付，平成 5 年 1 月 11 日受理)

History of Women Sumo as a Show Business

Eiko KANEDA

Oral tradition says women sumo existed even in very old days. Historical evidence under the recent studies, however, is that it appeared only down in modern ages.

Since then the women sumo has been regarded as a show business, a kind of sumo with abnormal sexual perversion. It should be noted, however, that during the same period quite different women sumo performances were exercised down in the West Kyushu area as a kind of folk arts, or up in Akita perfecture as one of the means of praying for rain. The latter women sumos also should be re-exposed individually under the historical light. Starting from examination into women sumo in the show business, this study has clarified the following facts: Although women sumo appeared in the literature of Edo era, none of them has been identified with historical evidence. In the Meiji era, the women sumo parties were organized into business show companies. In the latter part of the era, when was the most prosperous period for them, more than twenty-two women sumo companies made tours all around Japan to give performances. Famous ones among them were Takatama's Party and Ishiyama Women Sumo from Yamagata perfecture. The performances achieved wide popularity as various feats of unbelievable strength they demonstrated there besides sumo matches attracted people, not simply as an amusement of watching women's naked bodies. However, the women sumo show business declined after the outbreak of World War II.

1. 研究のねらい

「女相撲」に関する日本最古の文献は，『日本書紀』に見られ[1]，今日ではこれをもって女相撲の起源とするのが定説となっている。しかし史実として確認できるようになるのには，現在のところ近世にまで下らなければならない。

江戸時代になると女相撲は，まず浮世草子や浄瑠璃などに文学作品として登場する。実際に行われたのは，延享元年（1744 年）かまたはその少し以前で[2]，明和 6 年（1769 年）になると，初めて盲と女の相撲が行われた[3]。しかしそれらは，やがて明和末か安永初期に禁止される運びとなった[4]。

ところが，文政 9 年（1826 年）になると再度，江戸西両国広小路で盲と女の相撲の興行が行われ，さらに女相撲だけの興行が嘉永元年の春から大阪難波新地で，名古屋上り女相撲の興行によって取り仕切られた[5]。女相撲はこのように延享から嘉永まで行なわれていたものの，この時期における女相撲に関する史料は，いずれも断片的であり，組織的な興行団の存在を確定することは難しい。

明治期になると，山形を中心に組織化された女相撲の興行団が現れ，やがて海外にまで進出する勢力を持つようになる[6]。したがって女相撲が，組織化された興行団のもとに活動をするようになったのは明治期に入ってからのことであると言えよう。

そこで本研究では，興行としての女相撲が確立された年代を明治期と見なし，明治期から昭和（戦前まで）にかけての興行としての女相撲について，その盛衰を明らかにしていきたい。

2. 明治期から昭和期にいたる女相撲興行の経緯

1) 明治期における女相撲

明治初期になると，女相撲は禁止令が出されるほどの

* 体育史研究室

表1　女相撲番付表（明治23年11月13日，於：両国回向院境内）

	番付	シコ名（本名）	年齢	身長（約cm）	体重（約kg）	出身	備考
東	大関	富士山（高橋よし）	26才8ヶ月	5尺2寸5分（159）	16貫200目（61）	山形県東村山郡	
	関脇	北海道（石山きわ）	24才7ヶ月	4尺8寸2分（146）	16貫500目（62）		日光山の実妹、毎度初切の役を勤める
	小結	妹背山（櫻井りん）	20才9ヶ月	5尺4寸3分（165）	19貫（71）	宮城県遠田郡	腹槽に評判よし　腕力強し 田舎では四斗俵四俵を背負い往来
	前頭	金剛石（石山きく）	15才4ヶ月	4尺9寸5分（150）	12貫500目（47）		日光山の養女＝北海道の妹 腹槽の上乗りを勤める　美人
		唐獅子、淡路島　、蒸気船、電灯、大鳥山					
西	大関	遠江灘（神保たけ）	21才6ヶ月	5尺2寸5分（159）	21貫300目（80）	福島県信夫郡	歯力強し　27貫目の土俵を前歯で加え、左右の手に四斗俵をさげて土俵を往来
	関脇	東海道（飯野もと）	20才1ヶ月	4尺9寸（148）	15貫200目（57）	山形県東田川郡	北海道と交る初切を勤む
	小結	日高川（手塚くの）	24才9ヶ月	5尺1寸（155）	17貫（64）	山形県東賜賜郡	歯の鍛練中、だが15、6貫目位の品は容易にくわえる
	前頭	鯱（佐藤なえ）	21才1ヶ月	4尺7寸（142）	15貫（56）	山形県東村山郡	
		日光山（斉藤きん）	27才11ヶ月	5尺1寸（155）	14貫300目（54）	山形県東村山郡	11年前、前頭取齊藤祐義に嫁ぎ、女相撲の隊長となる
		八丈島（梅谷ゑん）	22才9ヶ月	4尺9寸3分（149）	16貫500目（62）	山形県飽海郡	
		入舟（遠藤みつ）	24才4ヶ月	4尺9寸5分（150）	16貫500目（62）	山形県山形市	
		珊瑚樹、電信					

熱狂ぶりを見せていた。すなわち，明治維新の新政府は，明治6年7月19日御布告第256号で「各地方違式詿違條例別冊ノ通被定候條此旨布告候事　但地方ノ便宜ニ依リ斟酌増減ノ廉ハ警保寮ヘ可伺出且條例掲示ノ義モ同僚ノ指揮ヲ可受事」[7] として『違式詿違條例』95カ条を公布したが，その第21條に，「男女相撲並ニ蛇遣ヒ其他醜體ヲ見世物ニ出ス者」と義務づけ，事実上見世物としての女相撲を禁止したのであった[8]。

しかしこのような禁止令の公布にも拘らず，女相撲の興行が依然としてつづけられた。14年後の明治20年の紙上には，「女力士が拘束される」という見出しも見られる。それは次のとおりであった[9]:

数百年の習慣とはいえ，力士が裸体のまま両々相当るは，文明の今日にありて恥ずべき事柄などという人も多き中に，婦女の身にしてあられもなき，観衆の前をも憚らず男力士のごとくに，一条の厚き犢鼻褌を締め込み，島田髷の娘の打扮にて四つに取り組み，大なる乳房を左右に振り分け力を角するなどとは，実に興の醒めたる話なるが，客月中のこととかや，越後高田に於いて右の女相撲を興行せしに，奇を好む人情として，観客所狭きまでに押し掛け，力の強弱は後の手に廻して，容姿の醜美を評するもありしとか。しかるに同月二十八日，右女相撲の一人はる（二十二年）といえるは，突然その筋へ拘束されたり。

このように，当時の女相撲は力の強弱よりも，むしろ

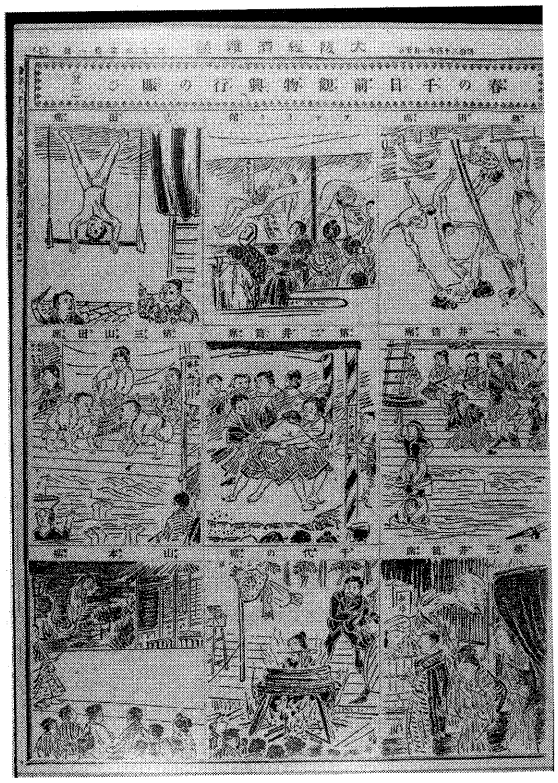

写真1　高玉大力一座（第二井筒席）

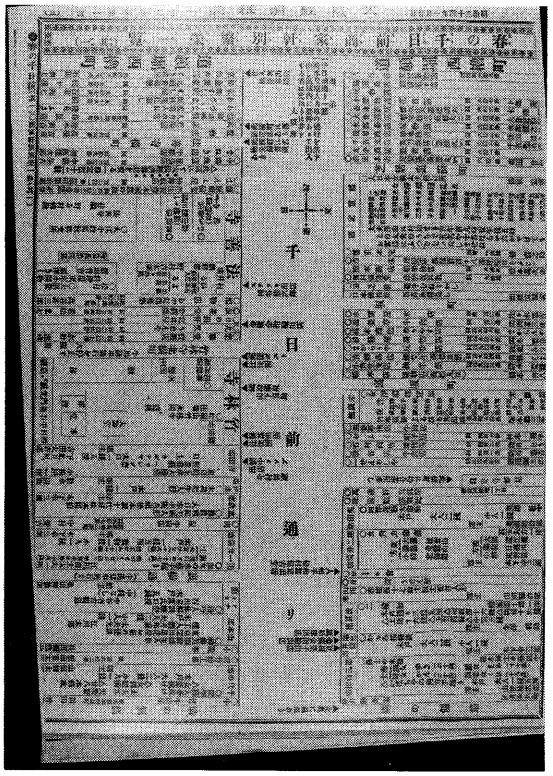

写真2　春の千日前商家軒別繁栄一覧

容姿の醜美を評することに興味が置かれていたと言えよう。

いっぽう明治23年11月12日付の『讀賣新聞』では「花櫓娘角力」と題し，女相撲興行団の東京入りについて，赤馬車40台を率いて上野の停車場まで関係者が出迎えたと報じている。この記事は当該の興行の規模が大きかったことを伝えているが，興行それ自体については，2日後の14日付の『讀賣新聞』に詳しく描写されている[10]:

前號の紙上に記載せし両國回向院境内に於て興行する女角力は彌よ昨十三日より開場したるぞ　其概畧は櫓土俵と設け力士の塵手水其他仕切口等總て普通角力と同様なるぞ　力士は一様に銀杏返しに髪を結ひ顔に紅粉を粧ひ孰れも半股引に肉繻絆を着用して半身を掩ひ金紗摸様に各自記名の化粧廻しを胸高にゞめ込み初目見として土俵入をなし　夫れより角力二番勝負六番あり次い妹脊山大力腹櫓にて廿貫目廿二貫五百目廿三貫目の土俵三俵を腹に受け止め之れに金剛石きくの上乗りは大喝采を得て　夫れよりまた二番勝負次で飛付三人抜き勝負は妹脊山勝抜き賞を得たるぞ　孰れも花々敷活潑の取組にて大に觀客の興に入り初日に珍敷大入なり

この記事は女相撲が「普通の相撲」として行なわれ，普通に女同士が取り組んでいたことを示している。

さらに，ここに登場した女力士の詳細は，『風俗画報』（明治23年12月10日付）によっても知ることができる（表1）[11]。それを見ると「蒸気船」，「電灯」，あるいは「電信」など，当時新しかった文明の利器がシコ名に用いられている。だが，同書によると，その女相撲も，「此度の如く体格非常にして男の力士を欺くが如きにはあらざるべし然るに同月廿七日其筋より差止となり櫓太鼓看板等廿八日より取除き力芸のみの業となりぬ」[12] と記されているように，その2週間後には力芸のみを強いられるようになった。

しかし，組織そのものが解体したわけではなかった。大阪にも，明治34年に女相撲の興行が行なわれていた。『大阪経済雑誌』（明治34年1月20日付）の「春の千日前商家軒別繁榮一覧」（写真1, 2）を見ると，「女角力曲藝　高玉大力一座」と題して，東方-大関妹背山，関脇金龍山，小結北海道，西方-大関遠江灘，関脇日高川，小結

東海道の名が記されている。このメンバーは，金龍山を除き，明治23年のそれと同名である。したがって，明治23年に東京で興行した一座と「高玉大力一座」とは同じ組織であったとみなすことができる。また明治の終わり頃には，興行として巡業している女相撲の一座は，大小合わせ23以上あり，そのほとんどは山形地方に生まれ，全国をまたにかけて巡業している者であったとされている[13]。このことからも女相撲禁止以後も女相撲の組織が存在しつづけたことを知ることができよう。

2) 大正期〜昭和期にかけての女相撲

女相撲の興行は京都でも国技館[14]で，大正12年12月1日を初日として行なわれた。この時の一座は石山宗太郎，同じく嘉一を会主とする「石山女大相撲」一行であった。東方，17名，西方，17名，計34名の団体で，大関，関脇，小結，前頭といった役があり，興行の内容は，歯力・腹受けなどの力持，角力甚句，深川などの手踊演芸と，角力取組の組合せの形式で，当時としては最も大きな一座であった[15]。

この石山女大相撲は，大正15年3月には東京浅草仲見世の裏空地で興行している。しかしながらこの興行で，観衆の男の飛び入り相撲を許したため，同月24日，その興行は禁止された[16]。

しかし昭和5年6月20日には，先述の石山兵四郎を団長とする石山女大相撲一行が，25名の女力士と共に約半年間にわたりハワイの興業場日本館へ海外巡業を試みたということから[17]，その一座は解散せずに興行が続けられたとみなすことができる。

また女相撲の海外巡業は，石山女大相撲一座だけではなかった。昭和11年には，高玉一座が1年間近く，サイパン，テニアン，トラック，パラオ諸島へと巡業に出かけている[18]。このように，女相撲の興業は，昭和期に入って海外巡業を行なうまでに成長をとげたのである。

この勢いは日本の太平洋戦争へとひた走る時期においても衰えることはなかった。昭和16年11月27日から京都府宇治駅吉田屋旅館前空地で興行しているからである。当時，その女相撲興行は次のように宣伝されている[19]:

防空演習でも開演いたします。見よ非常時日本人の血を湧かす，来れ大国技角力の火と熱の戦場へ。

昨年御当地に於て多大の人気を博したる大日本女角力協会遠江灘一行五十余名と当年二十歳三十七貫の新進巨豪も加て開演致します。何卒賑々敷御来場の程を。

二十五貫口中歯力。百五十貫腹の上の餅つき。一人にて六人背負ひ。……

このように，太平洋戦争開始直前の時期においても，興行は行われていたことが分かるが，女相撲は戦争を味方に引き込んでいったともみなすことができよう。

戦後になると，武蔵小山駅前空地などを始めとし，昭和26年12月には高田馬場都電終点裏空地に，翌新春には新宿伊勢丹百貨店横空地にと，石山兵四郎一行の「日本唯一・石山女大相撲」が，東京都内を巡業していた[20]。しかしこの一座もやがてサーカスに転じ，衰退していった。

3. 女相撲興行の組織と内容

1) 「高玉一座」と「石山女大相撲」の興行組織

これまでの叙述から明らかなように，明治期から昭和（戦前）までの女相撲興行団は，「高玉一座」と「石山女大相撲」に代表される。

これらの組織はどのように形成されたのであろうか。『風俗画報』では興行女相撲について，「其起源は長野縣士族齊藤祐義と言へる興行師去る明治十六年中山形に滞在中女角力類似の興行ありしを見て……」とある。このことから推して，明治16年には，すでに山形では興行が行なわれていたことが分かる。

ところで明治22年，山形県高擶村（現，天童市清池）の八幡神社に縦103 cm，横254 cmもの女相撲の絵馬が奉納されたが[22]，その施主は本間半三郎・石山兵四郎・斉藤祐義の三名で，描いたのは鶴遊と記されている。まさしくこの斉藤祐義なる人物は，先に述べた信州の興行師であるから，この地を訪れた際，本間，石山両氏の二名と共に，興行の安全と成功を祈り奉納したものと言われている[21]。そうして，この石山兵四郎が，「石山大女相撲」を組織した人物であった。現地調査にて得た関係者の話によると，元々「高玉一座」があり，後に石山にも興行を依頼したと言うことであった。

この高玉一座の方は，2代目，本間勘十郎が率いる興行団の時，当時一座を2部に分けて，東日本と西日本とを分割巡業しており，総勢35名の力士集団で，大関，関脇，小結，張出前頭，前頭から構成されていたという[23]。

2) 女相撲興行の内容

興行女相撲の内容について，ここでは比較的資料の多い大正期以降に焦点をあて，検討を加えることにする。

大正12年12月1日より，京都で行なわれた，石山宗太郎，同じく嘉一を会主とする一座では，『おんなすもう』に興行の内容として，歯力・腹受けなどの力持，角力甚句，深川などの手踊演芸と，角力取組の組合などが記されている[24]。

また，小沢昭一氏の『私のための芸能野史』[25]では，高

写真3　昭和26年東京興行の石山女大相撲番付

玉興行団の元女力士「梅の里」からインタビューが記されているが，それは彼女の年齢からして，主に大正期のことと判断される[26]。その中から当時の様子をいくつか知ることができる。まず歯力の芸についてであるが，これは，「最初は首にこたえて，呼ばれても首を廻せないようになる。首の骨が折れたと思う位につらい。また，虫歯のある人は絶対にダメ。丈夫な人でも，俵をくわえそこなうと歯を欠く。欠くどころか，前歯が一ぺんに全部とれてしまった人がいた。」と言うほど苦行であった。腹受けにしても，「腹にタコが出来るようになるまでは，つらいものである。」という。また，「本職の相撲取くずれを呼んで来て，毎朝，相撲の稽古をみっちりやったものである。」と言うから，見世物と言えども人並以上の体力を要したものと思われる。

ところで，昭和26年の石山女相撲の様子については，当時の番付表からその詳細を知ることができる（写真3）。これによると，会主は石山兵四郎[27]であり，取締役かつ勧進元は四ツ車よね子という女性であったこと。さらに3人の行司は男性で，女力士は前頭から大関まで，東に16人，西にも16人いたことが分かる。また女力士の出身地は，東北が多いが中には大阪，佐渡，高知，静岡などもいた。さらに内容としては，「力持」と題して，「力士五名を我身に纏い土俵内を歩行す」と言った1人にての5人背負い，「二十五貫目ある土俵を前歯にて咥へ土俵内歩行す」と言った口中歯力，さらに「腹の上に土俵十俵を二重に積み其の上に臼を乗せ力士二名にて餅搗きをなす（百八十貫以上）」と言った腹の上の餅つきの他，相撲甚句手踊などが披露されたようである。この番付表に記載されている内容を見る限りでは，前述した京都興行の第一北倶楽部女相撲協会で行われていたそれと大差は見受けられない。いずれにしても，このように怪力を発揮し，それを見世物にしていた。そしてそこには，トリックも何もなくただ日常のトレーニングによるものであったことが伺える。

この人並はずれた力芸について宮田登氏は，「すでに見世物となっている女相撲には，隠れた女の大力に一つの価値を置く思考が欠けている」[28]とした上で，「女の見世物というものは，その形態はともあれ女の霊力の発現の場を予想したものに他ならない。」と断言している[29]。このことからすると，多少の飛躍を恐れずにいえば女相撲に見られる力芸も，一見物理的な力を行使しているかに見えるが，実はその隠れた部分に女の霊力を秘めて発現することによって成り立たせていると見ることもできよう。

4. 結　　び

女相撲は日本書紀の時代から語り継がれて来ているが，多くの史料が確認されるのは江戸時代に入ってからのことである。しかしながら，江戸時代に，組織化された女相撲の興行団が存在していたか否かについては現在のところ不明な部分が多い。

明治中期頃からは，組織的な興業女相撲団が形成され活動していた。その代表的な興業団は山形県の「高玉力女相撲」と「石山女大相撲」であった。

興行としての女相撲が隆盛を成したのは，ただ単に人々が女性の裸体鑑賞を目的としたことにあったとは言い難い。それはおそらく，歯力の芸とか，腹上の餅つきなど，当時としても一般大衆の人々とはかけ離れた人間技が人々を魅了させたのであろう。

この興業としての女相撲は，昭和初期まで盛んに続けられていたが，戦後の価値感の激変に伴う娯楽の変化には順応することができず，やがて衰退していった。

注記・参考文献

1) 『日本書記』巻第14，雄略天皇13年（469年）9月の項に記されている。
2) 雄松比良彦：『女相撲史論―江戸時代女相撲史論その従来流布説の批判と再構成の試案―』京都謫仙居発行，1983, p. 20.
　本書によると，それは江戸両国で始まったこと

が『続談海』に見られるとしている。

3) 雄松比良彦：前掲書，p. 23.
明和年間には「まともなすもう」と「エログロな好色見世物としてのすもう」が混在していた。

4) 雄松比良彦：前掲書，pp. 23–25.
同書によると，明和末か安永初期，上方にて女相撲，盲・女相撲が禁止され，続いて天明中期，江戸での女相撲，盲・女相撲が禁止されたと言われている。

5) 朝倉無声：『見世物研究』（青陽堂出版，昭和三年刊の複製再刊）思文閣出版，1988, pp. 65–66.

6) このことについては，「3，女相撲興行の組織と内容」で詳説する。
なお，明治期には，「興行としての女相撲」の他，「郷土芸能としての女相撲」や「雨乞としての女相撲」も地方で行なわれていたようであるが，それらに関しては別に稿を改めることにしたい。

7) 引用に関し，ワープロにない漢字およびかな文字は，現代仮名づかいを，変体がなは現行平かなにした。以下，本文中の記述は同様に取り扱うものとする。

8) 内閣官報局：『法令全書（第六巻–1)』（覆刻原本＝明治22年刊），原書房，昭和63年.
『見世物研究』（前掲書）では，「明治五年三月十九日至り，男女相撲の見世物を差止められた結果，終に絶滅したのである」と記されており，東京では明治5年のこととしている。

9) 時事新報（内川芳美，松島栄一監修『明治ニュース事典　第三巻』1985，「女力士が拘束される」の項に所収).

10) 『讀賣新聞』明治23年11月14日付。

11) この表は，『風俗画報』(pp. 10–11) に掲載されている内容を，筆者が表にしたものである。

12) 『風俗画報』明治23年12月10日付，p. 11.

13) 平井　通：『おんなすもう』有光書房，昭和47年復刊，p. 51.

14) 現在の京都市内にあった。大正年間はほとんど使用されていなかった。

15) 平井　通：前掲書，p. 48.

16) 平井　通：前掲書，pp. 49–50.

17) 平井　通：前掲書，p. 51.

18) これは聞き取り調査による。

19) 平井　通：前掲書，p. 52.

20) 平井　通：前掲書，p. 56.

21) その絵馬は兵の印半天を着て「女大力」の旗を持った男に続き，豊かな乳房を露骨にした十二人の女力士が，きりりと締めこんだ化粧廻しをつけ，まさに神社の鳥居をくぐろうとしている。

22) 渡辺信三：『やまがたの絵馬』やまがた散歩社，昭和60年，pp. 203–205.
なお，本書では「石山平四郎」と表記されているが，「石山兵四郎」の誤記である。

23) 平井　通：前掲書，p. 51.

24) 平井　通：前掲書，p. 51.

25) 小沢昭一：『私のための芸能野史』芸術生活社，昭和48年，pp. 80–81.

26) これまで筆者が調べた限りでは，興行としての女相撲の役は大関までであったが，本書では，梅の里は最後には横綱になったと記されている。

27) 明治23年の「石山大女相撲」も石山兵四郎であった。

28) 宮田　登：『ヒメの民俗学』青土社，1987, p. 17.

29) 宮田　登：前掲書，p. 20.